

ニライカナイ雑記

瀬戸山ひろ

「海上の道」に始まり「海神宮考」「みろくの船」「根の国の話」「鼠の浄土」
これらの柳田国男の著作を読んで出会った世界は、未知の宝庫だった。
一部を列挙すると

アイ・アユの風、寄り物、伊波普猷、私年号、フォクロア、扶桑伝説、沖縄三
母音、弥勒の信仰、みろくの出世、アマミキヨ、オトジキヨ、オボツカクラ、ニ
ルヤ、「おもろ草紙」、子安貝、セヂ、テダ、ミミラク、「弓張月」、「倭名抄」、
徐福伝説、常民、サンカ、鹿島踊り、ニイルピト、
話が飛び火して「古事記」、神代文字、田中一村等々・・・

これらが未消化のまま私の衰脳？に次々と入ってきたからたまらない。混沌・
ぐちゃぐちゃとはこういう状態を言うのだろうかレポートの匙を投げたくなっ
た。しかし、いつまでもため息をついて、テーマを探し回っているわけにもいか
ない。そうだ、数年前の石垣・沖縄への旅、その時耳にした「ニライカナイ」、
南西諸島の信仰の基本概念という「ニライカナイ」、これについてひとまず考え
てみよう、とようやく決心がついた次第である。

まず、「ニライカナイ」は辞典ではどう述べられているのだろうか？
我らが敬愛する「日本国語大辞典」(小学館)には次のように載っていた。

沖縄や奄美で古来信じられた海の彼方の楽土

- 語源説 (1) ニライは沖からの意のギライ(儀来)から、カナイは沖に
対する辺カナイ(河内)で神のいる遙かな楽土の義のギライ
カナイから(「琉球の宗教」折口信夫)
- (2) にらいは根の意で根の国(「海南小記」柳田国男)
- (3) にらいは宗家を意味する根屋から(「沖縄文化史辞典」西

郷信綱)

そうか、ギライカナイは(1)の折口説だったのか、とまた新しいことに会う。(2)が柳田説。それにしてもこのままだと理解しにくい。「記紀」の「根の国」とは地下に眠る死者の国と聞く。また、同辞典によると「根の国」は「日本古代の他界観の一つ死者の霊が行くと考えた地下の世界。底の国。黄泉。黄泉の国。ねのかたすくに。根には祖先の居住する世界という意味があると考えられ海上彼方にあつて祖霊のいる世界とも考えられていたと思われる。」とある。死者の国？それがどうして理想の「楽土」なのだろうか？

この疑問を念頭に(2)説の根拠を、今回読んだことをもとにまとめてみようと思う。

柳田先生は「ニライカナイ(場所によってはニルヤカナヤ)」がどんな所か、について次のように述べている。

- ・儀来婆という人が竜宮に行って帰ってきた話。
- ・ニルヤに生きて往来したという色々の昔話。
- ・ニルヤから渡ってきたと伝えられるものに
火・稲・イノチがある。
- ・ニルヤからセチ(霊力)が送られている。
- ・ニルヤにはティダ(太陽)の生まれ損ないの子孫の
鼠がいて時折やってくる。
- ・8月の行事に「ニライ」の大王という霊物が渡って
来るといふわざおぎ(芸能)が残っていた。(おなり神)
- ・また「沖縄には死んでニライに行くという話は1つ
しか知らない。」とも述べている。

これらの例はニライカナイは「行く」のではなくその異境から神・霊が「やって来る」、つまり来訪神の思想であることを示している。つまりニライカナイに、死者の行く所という意味は薄いのだ。それなのに柳田先生が、「ニライカナイ」は大和で言うところの「根の国(死者の住む地下の国)」であると主張するのは

なぜか？

実はここからユニークな柳田説が展開し始める。

結論から言うと「ネノクニ」という大和言葉（和語）を漢字で「根の国」と表記したために誤解が起こった、というのだ。表記し始めの頃はまだ元来のネノクニの意味が理解されていたが、時代の推移と共に元来の意味が失われ「地下」の意味で理解するようになったという。

この主張をしている部分は印象深い文章だったので、長いが引用しておく。

「死後の世界を意味するヨミチまたはヨミノクニという語は、今日も一部にはまだ現存するが、これがはたして漢字通りに光なき地下の国を意味したかどうか、確かな証拠もないのに『日本紀』にも『古事記』にも夙くから「黄泉」という隣国の語を用いていて、さもさも人の魂が土の底深く、入っていくものの様な印象を与えている。私などの推測では、是はまったくネノクニという我邦固有の大切な言葉に、無造作に漢字の「根」の字を当ててしまった結果、夙くこのような誤解を導いたものらしく思われる。」（「根の国の話」p 127）

「夙く『^{はや}積日本紀』(日本書紀の注釈書・13世紀)の私註以前から、我々の根国思想は一辺に偏し、彼処を黄泉国よみの国と同じとする解釈は、最近の復古時代までも続いていた。果たしてそんなことで上代の文献が残らず判るもののごとく思っていたのであろうか。合点のいかぬ話であった。たった一つの著名な例を挙げて、^{すさのお}素尊は^{はは}妣の国へ行くと称して、父の神の指命によって根国に渡って行きそこに年久しく住んでおられ、大国主の神は後にその国を訪れて、結婚しまた宝物を持ってこられた。これを漢土で黄泉とも読んでいた冥界のことだと、信じてこの記録を遺したと言えるだろうか。重要な大昔の一つの言葉でも、年を累ね世の中が改まれば、其の受け取り方がいつとなく変わって来ると、どうして考えてみる事ができなかつたか。」（「海神宮考」p99）

つまり「ネ」は樹木の下部にある地下（死者の国）を表すのではない。「根」には「基本・はじめ・強い力のあるもの」という意味もちゃんとあるのだ。

ここで柳田先生は「ネなる」国と言うように、形容詞的に使って「遠く遙かな

国」という意味ではないかとする。そして「遠い遙かな」を、沖縄や八重山では「ニルヤ」「ニーラ」(形容詞)と表現するということまでを確かめている。つまり「ネなる国」は「海の彼方にある安らかなこの世の人が行き来が可能と考えられた第二の世界」というのだ。これが元来のネノクニの意味なのだ。

柳田説によるとかなり以前から東の海に広がる島々にある種の、<説話> が広がっていたのではないかという。これは元々何か別の名で表現されていたが、早くから消えてしまったのではないかも。これがネノクニ・トコヨノクニ・トコヨベ・わたつみの神の宮・根屋・ニルヤ・ニライというぐあいに分化しやがて蓬莱・竜宮という「音の珍しい仙郷を外国から取り入れた」言葉で広く行き渡ったとしている。

これらに伝わる承話には大和のものと似通ったものが多いのはその証拠と考える。(蛭子と鼠・動物の報恩・死んだ人に会う話・猿とクラゲに兎とサメの話・浦島の子と海神宮・おなり神とトヨタマヒメの命・海彦山彦と富兄貧弟・寄木の親の話など)

大和では「ネノクニ」は意味が誤解されて伝承されていくが、西南諸島は変化の伝播が緩やかだったため元々の<説話>のパターンが色濃く残り、「ニライカナイ」として伝承されていったのだろう。

今、柳田先生の念頭にあるのは、漢字が我が国にもたらされ、文化が文字化されるより前の日本の姿であるらしい。その気持ちを示す言葉として

「国語の成長、または其の変化を考えている人たちに、いわゆる万葉時代よりもう少し前、我々の言葉が隣国の文字借用から、まだ大きな影響を受けなかった頃の成長ぶりを尋ねてもらいたく・・・」(「根の国の話」p 132)

と述べ、ついには次のように先人たちに手厳しい言葉を投げかけるに至る。

「多数帰化人の文字の知識を重用して、国の口語の相応に発育し複雑化して後まで、なお久しい間自分の表記法を設定せずいわゆる万葉式の不自由きわまる書き方を、最近の候文時代まで、守りつづけていた公けの過失のためであった。」

この最後の部分を読んだ時、私はどきり。こんな事は考えたことがない。万葉仮名を考えついた先人たちに、ひたすら尊敬の念を持っていただけだ。

文字を持たなかった日本列島の人々は口承で歴史・文化を伝えて来た。西暦500年頃、漢字というものがあることを知って、こんな便利なものがあるのかと驚喜したことだろう。漢字を駆使して和語をそのまま表記できるようになったことに誇りも持っていたはずだ。和語に漢字を当てはめて、ぴったりのものも多かったが、中にはニュアンスが違うものもあっただろう。和語「ネノクニ」のように漢字の影響で微妙に意味が変化させられた言葉がその例といえる。沖縄では表記文字がなく、万葉仮名も使用されなかったため、長い間口承で元々の言語が伝えられた。「おもしろさうし」ができるのは16世紀になってからである。柳田先生がなぜ先島諸島や沖縄列島に古代人の姿を求めたのかこれで少し理解できるような気がした。

私の住む府中町には「茂陰」という^{あざ}字があった。モカゲ と読む。小学生の頃この「茂陰」という漢字の印象から、緑の生い茂った場所を思い浮かべていたものだが、ずっと昔このあたりは海の中であり、どうも意味が違うのではないかと思うようになった。公民館の図書室で「府中町史」を調べてみたが、モカゲは鎌倉時代は「茂景」と書かれていた。漢字のイメージとまったく違う意味があったのかもしれない。

他にも府中にはミソオ、コゴモリ、ゴサソウ、オクビ、タレソの森、エノミヤなど一風変わった地名がある。ミソオは神武天皇の衣を献上したので「御衣尾」、タレソは神武天皇東征の折り現地の老人に「おまえはダレソ」と尋ねたからだとも言われている。真偽のほどはともかくこれらの和語の意味は何だったのだろう。つきとめられないまま今はもう見えかかっているのが残念だ。

また西区の草津は伝承によると「いくさつ」(軍津)だとか。「草」という漢字を使ったためもとの意味が消失した例である。「いつくしま」も元来はイチキシマヒメ(女神)を祭る島なのに「巖島」といういかめしい漢字を持たせられたのは皮肉である。

奈良にキトラ古墳とかドント垣内古墳とか今でもカタカナで書かれ、漢字が使われていない古墳がある。これらは口承で伝わったままの、ピカピカの和語なのだろうか。どんな意味を持っているのか、知りたいものだ。キトラが「亀虎」「黄寅」「癸羅」等と漢字で表記されていたら漢字の印象に左右されたに違いない。

話がとんでもない方に行ってしまった。柳田先生が追究した口承時代の日本の姿。沖縄地方にそのルーツを見出そうとしたが、口承をもとにするため仮説が多くなってしまふ。しかし先生の考え方からすれば口承にこそ真の姿が隠されている。文字による記録ばかり当てにしていけないと戒めているのは新鮮だ。

「海の文化の経歴が、日本ではまだ少しも研究せられないのは、私たちから見れば文献の中央山間への極端な片寄りと、文字が即ち学問の全部なりと、決めてかかろうとした偏見の結果である。」(「根の国の話」p 156)

(2004.9.19 記)

< 参考文献 >

「海上の道」 柳田国男著 岩波文庫 2003

「柳田國男」 新文芸読本 河出書房新社 1992

* この書物の中に、柳田氏の読書量に付いて述べたところがある。

柳田先生は「本は借りて読むもの」と認識し、「家に本が少なかったことが読書好きに走らせた。」と述懐している。

「新廣島城下町 第七集」 広島郷土史研究会 昭和49